くなりしとぞ、かくありし後、いよ〳〵改暦の事を思召立せ玉ひ、ふたゝび器用あまた製し玉ひけるが、中にも彼渾天儀の製を變じ、日月星を一つらに測量せん爲に、繁碎をはぶき、簡易にせらるべしと、年頃御考ありしが、延享元年にいたり、思召のまゝに其器をつくられしかば、簡天儀と名づけ玉ひけり、今にいたり、司天臺用ゆる所のもの則これなり、のち律暦淵源といへる書を、長崎より進らせしに、その中に、乾隆九年清王の英略もて、新に造られし撫辰儀といふものを、えるしたるが、まさしくこの簡天儀の製に少しもたがはず、えかも我延享元年甲子は、かれの乾隆九年にあたれり、年といひ、事といひ、かく暗合せること、ひとへに英明の主は、和漢ともにひとしき御事なりと、今さらに感仰し奉る所なり、

〔淇園文集六題首〕平天儀說題辭

平天儀者、本予昔年所創、然甚粗略不備、嚴生素善造窺天鏡、遂留意於天學、乃因予舊摸增加數物、天地日月星辰四時潮汐盈虛無不具備、而其說又古人未發之奇者甚多矣、出藍之青其斯之謂乎、

〔淇園文集六〕平天儀圖標題

此儀圖設圈輪、大小凡五重、內地毬、外天輪、而地具萬國之形勢、海潮之消長、天備月之盈虛、日之出沒、四時之氣候、二十八宿之度數、旦夕中星斗輪運轉十二支方維、晝夜分刻、覽者按曆定時日、運輪合躔度璇璣秘蘊殫見目睫、且以紙制之、故可卷而懷、測儀多制、此爲尤便、

〔本朝天文一〕三天儀之圖

古來、渾天儀アリト雖ドモ、日ノ運行ノミニシテ、日月相交リ、朔望年歲盈缺兩食ヲ見セシムル圖古今無之、予〇源慶安工夫之思惟之シテ、數ノ鐵輪ヲ以テ三光ノ度數ヲ刻、鉛ノ重ヲ以テ運之、日珠ニハ燈火ヲ入、算法ニ不違日食月食シ、月ノ盈缺、幷ニ一歲事々不殘見セシメ、三天儀ト號ス、此圖寶永年間ニ成就ス、今再ビ紙ニ畫シ、次ニ其曆算ヲ記シテ、全部九卷トナシ、異國ト間相違ノ儀アル